

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月19日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02592

研究課題名(和文) 『水滸伝』本文の研究

研究課題名(英文) The Study on the Text of the "Shuihuzhuan"

研究代表者

小松 謙 (KOMATSU, KEN)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：00195843

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：『水滸伝』の主要版本全文について、第七十一回までの完全な本文校勘を行って、各版本の関係を明確にした。その結果を踏まえて、『水滸伝』の本文が変化していく過程を詳細に跡づけ、『水滸伝』成立と変化の過程を具体的に示すことによって、中国において近代的な「小説」というジャンルが成長し、自立していく過程を解明した。あわせて、本文がどのように書きかえられたかを精密に検討することにより、話し言葉の語彙を使用する白話文が洗練され、書き言葉として自立していく過程を調査し、現代中国語の基本となる白話文がどのようにして成立したかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国文学において最も重要な作品の一つである『水滸伝』の主要版本について第七十一回までの完全な全文校勘を実施し、継承関係を明らかにした。更にその結果を踏まえ、『水滸伝』本文が変化していく過程から、「小説」というジャンルがどのようにして成立したか、現代中国語の原型となる白話文がどのようにして発達したかを解明した。これは中国文学・中国語学に大きく貢献するのみならず、日本において『水滸伝』を重要な模範として読本というジャンルが成立し、それが近代日本文学の母体となっていること、そこで使用されている中国白話語彙が日本語に影響していることを考慮すれば、日本文学・語学研究に基礎を与える重要な業績といえる。

研究成果の概要(英文)：At first, revised the full text of the main edition of "Shuihuzhuan" until chapter 71, and researched the relation between the editions. Then, traced the process of the transition about the text of the "Shuihuzhuan", explained the process of the creation and transition of "Shuihuzhuabn" by concrete evidence, researched the growth and independence of the "novel", as the genre of the modern meaning. At the same time, researched the method of rewrite of the text, and investigated the process of the growth of writtenn language using colloquial vocabulary.

研究分野：中国文学

キーワード：水滸伝 白話文学 四大奇書 小説 版本 明代文学 出版 語彙

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

『水滸伝』に対する過去の研究はおびただしい量にのぼるが、その中に主要テキストすべての間の異同を『水滸伝』の全文について精密に調査したものは一つとして存在しない。全体にわたる異同を確認した研究として知られるのは、王利器・呉曉鈴が校訂本『忠義水滸伝』作成にあたって附した校勘記であるが、これが精密とは言いがたいものであることには定評がある。これ以外の従来の研究は、全体の一部のみについて、しかも一部の版本のみを使用して校勘を加えたものであった。しかし、実際には異同の状況は部位によって異なっており、一部分を調査しただけで全体像を明らかにすることができるものではない。事実、従来の研究においては多くの誤った指摘がなされてきた。『水滸伝』を研究するためには、まず『水滸伝』本文とその異同の全体像を示すことが欠かせない。本研究は、『水滸伝』研究の前提となる基本的な作業を、初めて実施しようとするものである。申請者は、これまで『水滸伝』の成立過程を解明すべく、科学研究費補助金(基盤研究C)課題番号21520381「『四大奇書』の研究」(2009～11年)・同じく課題番号25370401「元・明・清における演劇と白話小説の関係に関する研究」(2012～15年)の助成も受けながら、「『水滸伝』成立考 内容面からのアプローチ」(『中国文学報』64)・「『水滸伝』成立考 語彙とテクニカルタームからのアプローチ」(高野陽子との共著、『中国文学報』65。以上はいずれも『『四大奇書』の研究』〔汲古書院2010〕に収録)・「水滸雑劇の世界 『水滸伝』成立以前の梁山泊物語」(『アジア遊学 「水滸伝」の衝撃』〔勉誠社2010])・「梁山泊物語の成立について 『水滸伝』成立前史」(『中国文学報』79)・『宝剣記』と『水滸伝』 林冲物語の成立について」(『京都府立大学学術報告』65)を発表してきた。これらの研究により、これまで知られていなかった『水滸伝』の成立事情は、かなりの程度まで明らかになったといつてよい。

本研究は、これらの研究成果を踏まえ、現在残る『水滸伝』の版本の主要なものについて、その全文に可能な限り精密な校勘を加えることによって、『水滸伝』各版本間の関係を明らかにするとともに、『水滸伝』本文の成立と変化の過程を解明し、ひいては白話文の成立と変遷の過程を具体的に示そうとするものである。

2. 研究の目的

『水滸伝』の全文について、可能な限り多くの版本による校勘を加え、異同の状況を精密に示す。これは、続く段階に進むための基礎作業であるのみならず、その結果を公表することにより、内外の多くの研究者に、『水滸伝』研究を進めるための基礎を提供することができるはずである。

次に、異同の状況を詳しく検討することにより、各版本間の関係を明らかにする。このことは、『水滸伝』の成立と展開を跡づける上で重要な意味を持つのみならず、それぞれの版本を刊行した出版主体の所在地や、想定されている読者層と結びつけることにより、『水滸伝』の刊行が、いつ、どこで、誰を対象になされたかについて考える手がかりとなるものである。ここから、『水滸伝』を中国社会の中に位置づけると同時に、逆に『水滸伝』を通して中国社会の特質を明らかにすることも可能になるものと見込まれる。

こうして版本間の関係を確認した上で、各本の間の変化を確認することにより、『水滸伝』本文の成立と変貌の過程を明らかにする。版本間において改変が繰り返されているということは、その全体像を把握すれば、『水滸伝』がどのようにして生成したかを解

明できるはずである。これは、近代文学において作家がどのようにして作品を創作していったかを解明することと同様の性格を持つ。違いは「作家」が複数であること、そしてそこに商業的・政治的などの社会的要因が密接に関わる点である。そこから逆に、社会と文学の関わりを解明することが可能になるものと期待される。

更に、本文間の異同を通して、白話文の成立過程を跡づけることを試みる。『水滸伝』が後の白話文、ひいては現代中国語に大きな影響を与えたことを考えれば、ここから「中国語」が生まれ出てくる過程を追跡することが可能になるものと見込まれる。白話語彙とは本来口頭語の語彙だったものであり、音声のみあって、文字は持っていなかったため、文字化するにあたっては、どの漢字を当てるかという問題が生じる。とりあえずよく用いる文字を当てるという段階から、誤解の少ない文字への書き換えが摸索され、その過程で従来は存在しなかった新たな文字を創り出すという動きも生じる。また文法面でも、書き言葉としてより誤解を生じにくい方向に語順を統一しようとする動きも存在する。『水滸伝』諸版本の間には、こうした一連の動きを具体的に示す事例がはっきりと認められる。これは、「中国語」誕生の過程を解明する上で重要な意味を持つものであるとともに、その語彙が日本語にも影響した点を考慮すれば、日本語語彙の研究にも寄与しうるものである。

これらの研究からは、「小説」というものがいかに成立し、楽しみのための読書という行為がいかに成長したかを、その最初期の代表というべき『水滸伝』を通して明らかにしうるものと思われる。

3. 研究の方法

『水滸伝』の各種版本をできる限り収集し、中国国家図書館所蔵容與堂本・無窮会蔵本・芥子園本・百二十回本のうち東京大学所蔵の神山閏次旧蔵本・金聖歎本について、とりあえず第七十一回まで全文の校勘作業を行うとともに、その他の版本、具体的には内閣文庫所蔵容與堂本・天理図書館所蔵容與堂本・百二十回本のうち全書本・『水滸志伝評林』・劉興我本・『二刻英雄譜』についても随所で確認を行って、『水滸伝』テキストの全体像を明らかにする。同時に、すべての異同について、それが生じた原因について考えるとともに、それぞれの異同が語学的にどのような意味を持つかについても、表記・文法の両面にわたって考察し、この考察を含んだ校勘記を作成する。以上の結果を踏まえて、『水滸伝』諸本間の関係と、本文の成立・変化の過程、白話文の変遷を論ずる論文を執筆する。

4. 研究成果

(1) 一年目は研究計画に基づき、『水滸伝』諸本、具体的には容與堂本(中国国家図書館所蔵本)・無窮会本・百二十回本(全伝本のうち神山閏次旧蔵本)・金聖歎本の第七十一回まで(金聖歎本が存在する範囲)及びいわゆる嘉靖本の全文について校勘作業を行い、更に内閣文庫・天理図書館所蔵の容與堂本・百二十回本(全書本)・三種の簡本についても調査を行って、精密な校勘記を作成した。その成果をふまえて、まず論文「金聖歎本『水滸伝』考」(『和漢語文研究』第14号、2016年11月)を執筆し、金聖歎本の成立過程を明らかにするとともに、改変の内容を詳細に分析することにより、金聖歎がいかなる意識を持って書き換えを行ったかを追跡し、彼が詩文と同等の文学作品として『水滸伝』を把握し、自立した文学作品たらしめようとしたことを証明して、ここに近代的「読書」と、今日いうところの「小説」が成立したと論じた。

(2) 更に、『水滸伝』諸本考」(『京都府立大学学術報告 人文』68号、2016年12月)を執筆、全文の完全な校勘結果をもとに、従来明確ではなかった諸版本の継承関係について論じ、無窮会本・百二十回本が直接容與堂本に基づいてはいないことなどを明らかにして、今は失われた複数の版本が現存する諸本の間介在したことを論証した。あわせて三種の容與堂本についてもその関係を整理するとともに、白話文学の研究手段としての校勘

作業の位置づけをも行った。

(3) また、前年度までの科研の成果として著書『中国白話文学研究 演劇と小説の関わりから』をまとめ、2016年11月、汲古書院から刊行した。

(4) 二年目には、前年度までに行った『水滸伝』諸版本の全文校勘作業(第七十一回まで)において、重要な版本である芥子園本が欠落していたことを発見したため、新たに同版本についても全文の校勘を実施し、前年度に発表した業績の内容に修正を加えた。その上で、ほぼ全容が明らかになった『水滸伝』諸版本の関係を全面的に踏まえた上で、その文学的・語学的な意義を明らかにする研究を推進し、文学面については論文「『水滸伝』本文の研究 - 文学的側面について」を『京都府立大学学術報告 人文』69号(2017年12月)に発表した。この論文は、前年度の研究によって明らかになった『水滸伝』諸版本の系統を踏まえ、そこに前述の芥子園本に関する修正を加えた上で、継承関係にある版本間の本文の相違とその相違が生じた原因を明らかにすることにより、白話文学が口頭芸能の影響を脱し、「白話文」という文体を完成させ、読んで楽しむ新たな文学としての白話小説が誕生する過程を解明したものである。これは、前年度に発表した「金聖歎本『水滸伝』考」で論じた近代的「読書」成立への過程を具体的に裏付けるものである。

(5) 語学面については「『水滸伝』本文の研究 「表記」について」を『和漢語文研究』第15号(2017年11月)に発表した。この論文は、元来発音のみあって文字のなかった口頭言語の写しであるがゆえに、固定した表記を持たなかった白話語彙が、様々な摸索を経て安定した表記を確定する過程を『水滸伝』諸版本の異同を通して明らかにしたもので、白話文が書記言語として確立した過程を具体的に示すのみならず、中国語における「表記」の意味を解明する上でも重要な意味を持つ業績である。

(6) 東京古典会の入札会に、従来中国国家図書館のみに存在すると考えられてきた石渠確保刻本が出品されているのを発見した。その後同書調査の機会を得て、第七十一回までの全文校勘を開始した。

(7) 三年目は、研究課題に関してすでに4本の論文を刊行した前年度までの成果を踏まえ、新たに発見した『水滸伝』石渠閣補刻本と他版本との完全な校勘を第七十一回まで実施し、その結果をもとに論文「『水滸伝』石渠閣補刻本本文の研究」を『中国文学報』第九十一冊に発表した。同誌は、石渠閣補刻本発見に当たって協力した上原究一・荒木達雄・孫琳浄の各氏による論文をあわせて、同版本に関する考察を各方面から徹底的に行ったものであり、各執筆者は綿密な連絡を取りながら、共同研究に近い形でそれぞれの論文を執筆した。これらの研究は、従来の『水滸伝』研究を塗り替える画期的な意義を持つものと評価されている。

(8) これと並行して、『水滸伝』ときわめて深い関わりを持つ『金瓶梅』の成立に関する研究を進め、同書が『水滸伝』に対するいわばアンチテーゼとして創作されたことを論証する論文「『金瓶梅』成立考」を執筆した。同論文は完成済みであるが、非常な長篇であるため、発表場所を得ることが困難と考えられる。そのため、すでに発表済みの『水滸伝』を論じた5本の論文とあわせて書籍『『水滸伝』と『金瓶梅』の研究』(仮題)とし、成果を社会に還元するため2020年度研究成果公開促進費に応募すべく準備中である。

(9) また、日本中国学会大会において、シンポジウム「武官・武人と文学」を主催し、早稲田大学の岡崎由美氏・神奈川大学の松浦智子氏・九州大学の井口千雪氏とともに、武官・武人が文学にどう関わったかについての発表を行った。同シンポジウムでは、本課題の成果を踏まえて、特に『水滸伝』『金瓶梅』と武人・武官の関係について論じた。同シンポジウムは、中国文学を新たな視点からとらえるものとして、大きな反響を呼んだ。

(10) 更に、『水滸伝』の原型であったとされる語り物芸能研究を深めるため、敦煌変文研究会を主催し、その成果として「大目乾連冥間救母變文」訳注(一)(二)を共著で発表した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 7件)

小松謙、金聖歎本『水滸伝』考、『和漢語文研究』14、査読有、2016、pp1-24

小松謙、「『水滸伝』諸本考」、『京都府立大学学術報告 人文』68、査読無、2016、pp55-91

小松謙、「『水滸伝』本文の研究 - 「表記」について」、『和漢語文研究』15、査読有、pp1 - 27

小松謙、「『水滸伝』本文の研究 - 文学的側面について」、『京都府立大学学術報告 人文』69、査読無、pp11 - 44

小松謙、「『水滸伝』石渠閣補刻本本文の研究」、『中国文学報』91、査読有、2017、pp112 - 154

小松謙、井口千雪、大賀晶子、川上萌実、孫琳浄、玉置奈保子、田村彩子、藤田優子、宮本陽佳、「大目乾連冥間救母變文」訳注(一)、『京都府立大学学術報告 人文』70、査読無、pp27 - 83

井口千雪、大賀晶子、川上萌実、小松謙、孫琳淨、玉置奈保子、田村彩子、藤田優子、宮本陽佳、「大目乾連冥間救母変文」訳注(二)、『和漢語文研究』、16、査読有、pp225 - 244

〔学会発表〕(計 1件)

小松謙・井口千雪・松浦智子・岡崎由美、シンポジウム「武人・武官と文学」、日本中国学会第70回大会、2018年10月7日、東京大学

〔図書〕(計 1件)

小松謙、汲古書院、『中国白話文学研究 - 演劇と小説の関わりから - 』、2016、pp1 - 370

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等：なし。

6. 研究組織

(1)研究分担者

なし。

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

なし。

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。